

**[B年] 聖霊降臨節第14主日(2026年8月23日)****【旧約聖書日課】イザヤ書 5章1～7節**

- 1 わたしは歌おう、わたしの愛する者のために  
そのぶどう畑の愛の歌を。  
わたしの愛する者は、肥沃な丘に  
ぶどう畑を持っていた。
- 2 よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。  
その真ん中に見張りの塔を立て、酒ぶねを掘り  
良いぶどうが実るのを待った。  
しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。
- 3 さあ、エルサレムに住む人、ユダの人よ  
わたしとわたしのぶどう畑の間を裁いてみよ。
- 4 わたしがぶどう畑のためになすべきことで  
何か、しなかったことがまだあるというのか。  
わたしは良いぶどうが実るのを待ったのに  
なぜ、酸っぱいぶどうが実ったのか。
- 5 さあ、お前たちに告げよう  
わたしがこのぶどう畑をどうするか。  
囲いを取り払い、焼かれるにまかせ  
石垣を崩し、踏み荒らされるにまかせ
- 6 わたしはこれを見捨てる。  
枝は刈り込まれず  
耕されることもなく  
茨やおどろが生い茂るであろう。  
雨を降らせるな、とわたしは雲に命じる。
- 7 イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑  
主が楽しんで植えられたのはユダの人々。  
主は裁き(ミシュバト)を待っておられたのに  
見よ、流血(ミスバハ)。  
正義(ツェダカ)を待っておられたのに  
見よ、叫喚(ツェアカ)。

**【使徒書日課】使徒言行録 13章44～52節**

<sup>44</sup>次の安息日になると、ほとんど町中の人为主  
の言葉を聞こうとして集まって来た。<sup>45</sup>しかし、  
ユダヤ人はこの群衆を見てひどくねたみ、口汚く  
ののしって、パウロの話すことに反対した。<sup>46</sup>そ  
こで、パウロとバルナバは勇敢に語った。「神の  
言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。  
だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の  
命を得るに値しない者になっている。見なさい、わ  
たしたちは異邦人の方に行く。<sup>47</sup>主はわたしたち  
にこう命じておられるからです。

『わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、  
あなたが、地の果てにまでも  
救いをもたらすために。』」

<sup>48</sup>異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉を賛  
美した。そして、永遠の命を得るように定められ  
ている人は皆、信仰に入った。<sup>49</sup>こうして、主の  
言葉はその地方全体に広まった。<sup>50</sup>ところが、ユ  
ダヤ人は、神をあがめる貴婦人たちや町のおもだ  
った人々を扇動して、パウロとバルナバを迫害さ  
せ、その地方から二人を追いつ出した。<sup>51</sup>それで、  
二人は彼らに対して足の塵を払い落とし、イコニ  
オンに行った。<sup>52</sup>他方、弟子たちは喜びと聖霊に  
満たされていた。

**【福音書日課】マルコによる福音書 12章1～12節**

1 イエスは、たとえて彼らに話し始められた。  
「ある人がぶどう園を作り、垣を巡らし、搾り場  
を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たち  
に貸して旅に出た。<sup>2</sup>収穫の時になったので、ぶど  
う園の収穫を受け取るために、僕を農夫たちのと  
ころへ送った。<sup>3</sup>だが、農夫たちは、この僕を捕ま  
えて袋だたきにし、何も持たせないで帰した。<sup>4</sup>そ  
こでまた、他の僕を送ったが、農夫たちはその頭  
を殴り、侮辱した。<sup>5</sup>更に、もう一人を送ったが、  
今度は殺した。そのほかに多くの僕を送ったが、  
ある者は殴られ、ある者は殺された。<sup>6</sup>まだ一人、  
愛する息子がいた。『わたしの息子なら敬ってく  
れるだろう』と言って、最後に息子を送った。<sup>7</sup>農  
夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、  
殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々の  
ものになる。』<sup>8</sup>そして、息子をつまえて殺し、ぶ  
どう園の外にほうり出してしまった。<sup>9</sup>さて、この  
ぶどう園の主人は、どうするだろうか。戻って来  
て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与  
えるにちがいない。<sup>10</sup>聖書にこう書いてあるのを  
読んだことがないのか。

『家を建てる者の捨てた石、  
これが隅の親石となった。』

<sup>11</sup>これは、主がなさったことで、  
わたしたちの目には不思議に見える。』」

<sup>12</sup>彼らは、イエスが自分たちに当てつけてこのた  
とえを話されたと気づいたので、イエスを捕まえ  
ようとしたが、群衆を恐れた。それで、イエスを  
その場に残して立ち去った。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## イザヤ書 5章1〜7節

- 1 私は歌おう、私の愛する者のために  
ぶどう畑の愛の歌を。  
愛する者は肥沃な丘にぶどう畑を持っていた。
- 2 彼は畑を掘り起こし、石を取り除き  
良いぶどうを植えた。  
また、畑の中央に見張りのやぐらを立て  
搾り場を掘った。  
彼は良いぶどうが実るのを待ち望んだ。  
しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。
- 3 さあ、エルサレムに住む人、ユダの人よ  
私とぶどう畑の間を裁いてみよ。
- 4 ぶどう畑に対してすべきことで  
私がしなかったことがまだあるか。  
私は良いぶどうが実るのを待ち望んだのに  
どうして酸っぱいぶどうが実ったのか。
- 5 そこで今、あなたがたに知らせよう  
私がぶどう畑にしようとしていることを。  
垣根を取り払い、荒らされるに任せ  
石垣を壊し、踏みつけられるに任せる。
- 6 私はこれを荒れ地にする。  
枝は刈り込まれず  
耕されることもなく  
茨とあざみが生い茂る。  
私は雲に命じて、もはや雨を降らせない。
- 7 万軍の主のぶどう畑とは、  
イスラエルの家のこと。  
ユダの人こそ、主が喜んで植えたもの。  
主は公正〔ヘブライ語→ミシュパト〕を  
待ち望んだのに  
そこには、流血〔ヘブライ語→ミスパハ〕。  
正義〔ヘブライ語→ツェダカ〕を待ち望んだのに  
そこには、叫び〔ヘブライ語→ツェアカ〕。

## 使徒言行録 13章44〜52節

44次の安息日になると、ほとんど町中の人为主の言葉〔異本→神の言葉〕を聞こうとして集まって来た。45しかし、ユダヤ人はこの群衆を見てひどく妬み、口汚く罵って、パウロの話すことに反対した。46そこで、パウロとバルナバは堂々と語った。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だが、あなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命にふさわしくない者にしてい

る。そこで、私たちは異邦人の方へと向かいます。47主は私たちにこう命じておられるからです。

『私は、あなたを異邦人の光とし、地の果てにまで救いをもたらす者とした。』」48異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉〔異本→神の言葉〕を崇めた。そして、永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。49こうして、主の言葉はその地方全体に広まった。50ところが、ユダヤ人は、神を崇める貴婦人たちや町の有力者たちを唆して、パウロとバルナバを迫害させ、その地方から二人を追い出した。51それで、二人は彼らに対して足の埃を払い落とし、イコニオンに行った。52他方、弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。

## マルコによる福音書 12章1〜12節

1イエスは、たとえて彼らに話し始められた。「ある人がぶどう園を造り、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たち〔→小作人〕に貸して旅に出た。2収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を受け取るために、僕を農夫たちのところへ送った。3ところが、農夫たちは、この僕を捕まえて袋叩きにし、何も持たせないで帰した。4そこでまた、他の僕を送ったが、農夫たちはその頭を殴り、侮辱した。5さらに、もう一人を送ったが、今度は殺した。そのほかに多くの僕を送ったが、ある者は殴られ、ある者は殺された。6その人には、まだ一人、愛する息子がいた。『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。7農夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、財産はこちらのものだ。』8そして、息子をつまえて殺し、ぶどう園の外に放り出した。9さて、ぶどう園の主人は、どうするだろうか。戻って来て、農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるに違いない。10聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか。

『家を建てる者の捨てた石  
これが隅の親石となった。』

11 これは、主がなさったことで、  
私たちの目には不思議なこと。』」

12彼らは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づいたので、イエスを捕まえようとしたが、群衆を恐れた。それで、イエスをその場に残して立ち去った。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

- ・8月23日「聖霊降臨節第14主日」の日課主題は「すべての人に対する教会の働き」。
- ・旧約日課は、「イザヤ書」から、「ぶどう畑の歌」と呼ばれる預言箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、ピシディア州アンティオキアでの宣教を伝える説話の末尾。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、「ぶどう園と農夫のたとえ」の語録箇所。

**旧約日課(イザヤ5章より)**

- ・「イザヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「後の預言者」の第一に位置づけられる預言文書。基本的な理解の概要は、前回資料「聖書と祈りの会 260812」を参照。標題で示される前8世紀の歴史的な宮廷預言者イザヤに帰される前半部(1~39章)と、前6世紀後半のバビロン捕囚期以降にユダヤ帰還・エルサレム再建事業を通して新しいユダヤ共同体構築を目指すために歴史的預言者イザヤを模範とした祭司・預言者集団に帰されと考えられる後半部(40~66章、通例「第二イザヤ」と呼ばれる)に分けられる。
- ・日課箇所は、「ぶどう畑の愛の歌」として始められる「ぶどう畑」のたとえを用いた預言句。1~6節は「わたし」を主語とする告知として記される一方、7節は客観的な立ち位置からの告知として告げられる構成になっている。この「わたし」が誰か、7節の告知はどこから発せられるものであるかは、さまざまな解釈があり得る。1~6節を、さらに1~2節と3~6節に分けて、それぞれの「わたし」を異なる主体と解するのが、学者らの通説。すなわち、1~2節の「わたし」は「預言者」であり、3~6節の「わたし」は「主」とであると解して説明される。しかし、主語「わたし」が3節で入れ替わるとすると、文章構成において唐突であり(学者らもこれを認めている)、読者(聴衆)の自然な理解にそぐわず、この解釈は学問的な技巧を前提にしないと成り立たない。敢えて学者の解釈を脇に置いて、一読者として文章構成に即した読解をするならば、1~6節の「わたし」は同一人格であり、7節の「万軍の主」と同定され、また、7節は1~6節の「万軍の主」自身の「わたし」語りを踏まえた「預言者」の告知、と解するのが自然な解釈になる。その際、学者が指摘するように、1節の「わたし」と「わたしの愛する者」を別人格として解さなければならないという修辭法的(文学技法的)な必然性はない。
- ・「イスラエルの家」(7節)は、学者の通説では、「イザヤ書」中では北王国「イスラエル」を指す場合と、南北両王国を統合的に指す場合の両方の用法があり、本節では後者であるとされるのが一般的であるが、どちらの用法であるかを峻別する基準は記述の内容解釈次第(学者次第!)である。特に本書前半部(1~39章)では、北王国が実際に存続していた時期から滅亡期に至る時代であることを踏まえれば、原則

として北王国(の王権の下にある支配者ら)を指して「イスラエルの家」が用いられていると解することを前提とするのが自然である。なお、歴史的預言者イザヤの活動した時代(南王国ウジヤ王、ヨタム王、アハズ王、ヒゼキヤ王の時代)の歴史的背景には、「列王記」下15~20章や「イザヤ書」7章などを参照。

**使徒書日課(使徒13章より)**

- ・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続巻として著された「初代教会正史物語」を描く歴史物語文書。主イエスの復活・昇天後にエルサレムに留まった使徒たちを中心とする弟子集団約120人が、「聖霊降臨」の体験を機に宣教活動へと促され、ユダヤ・ガリラヤ系のユダヤ人に留まらず、世界各地のディアスポラ系ユダヤ人とその会堂共同体に連なる異邦人(改宗者、神を畏れる者=求道者)、さらにはエルサレム系ユダヤ人と対立していたイスラエル傍系サマリア人を含む人々を対象に宣教活動を展開した結果、地中海世界を広く横断する「教会ネットワーク」を形成するに至ったことを物語る。その過程の中心人物として、前半では使徒ペトロを、後半では後から加えられた宣教者パウロ(サウロ)を主体として物語を展開させている。
- ・日課箇所は、当初「教会」運動反対派として活動していながら、その活動を通して回心して「教会」メンバーとなったパウロ(サウロ)が、シリア州アンティオキア教会の指導者バルナバに見出されて同教会の派遣する宣教団(バルナバ宣教団)に加えられて携わった最初の宣教旅行の一場面として大きく取り上げられているピシディア州アンティオキアでの出来事を物語る箇所の最終場面。彼ら宣教団は、同地に入るとユダヤ会堂の安息日礼拝に参加することを通して、もっぱら同地のユダヤ教信者(ユダヤ人、異邦人改宗者、異邦人求道者=神を畏れる者)を対象に「イエスの福音」を宣べ伝えた。日課箇所は、最初の安息日礼拝での好評を踏まえて、再び壊れて翌安息日の会堂礼拝に参加した際の人々(ユダヤ人と異邦人)の反応を対照的に描写し、その対立による混乱によって同地を去らなければならなくなると物語っている。
- ・ここで描かれる「ユダヤ人」は、前回の安息日礼拝でパウロやバルナバを歓迎した人々と同一であるはずだが、その反応は歓迎から拒絶へと大きく変化したものとして描かれる。ただし、これを、同じ人が歓迎から拒絶へと変化したと解するか、あるいは、当初から「ユダヤ人」の中に歓迎する者と拒絶する者がいたけれども、最初は歓迎する者が前面に現れたのに対して、次には拒絶する者たちが表面化したと解するかで、事柄の認識が微妙に違うものとなる。日課箇所の前段には、パウロとバルナバに従おうとする「多くのユダヤ人と神をあがめる改宗者(=異邦人)」(43節)が描かれており、実際には、「ユダヤ人」の中に歓迎する者と拒絶する者がいた、ということだろう。

**福音書日課(マルコ 12 章より)**

- ・日課箇所は、主イエスの「受難物語」の中で「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝える「ぶどう園と農夫のたとえ」の語録箇所。
- ・前段で主イエスが神殿境内において「祭司長、律法学者、長老たち」から「権威」を問われたことを受けて対話された終わりに語られた「たとえ」として置かれており、共観福音書は共通してこれが彼らに当てつけて語られたものとして彼ら自身に解されたという説明を付している。
- ・他方で、「マタイ」は、前段との間に「二人の息子のたとえ」を挿入した上で、日課箇所のたとえ語録についても、「マルコ」や「ルカ」が途切れない教えとしていっているのに対して、途中に対話形式を導入した問答語録に変更している。この「マタイ」の問答語録の形式は、「二人の息子のたとえ」にも用いられているものであり、さらには共観福音書が共通して置いている前段「権威についての問答」の形式でもある。「マタイ」は、この場面の最初で採られている対話形式を踏まえて一連の場面を構成し直したのだろう。
- ・「ぶどう園のたとえ」は、いわゆるメタファー(隠喩)を用いた寓話(寓喩)として語られており、「たとえ」の最後(9 節)には教訓を示唆する句が置かれている。しかし、さらに続けて 10~11 節で聖句の引用がされることで、これは単なる教訓的寓話ではなく、殺された「僕」や「息子」が『(旧約)聖書』において何者を指し示すという聖書解釈の議論に方向づけられている。つまり、「ぶどう園を作った農夫」は神を、その「ぶどう園」に派遣される「僕」らは「預言者」らを、最後に送り込まれた「息子」は(聖書には無いが、弟子たちの教会における理解として)「主イエス」を、それぞれ指し示すという聖書解釈の枠組みの中で、その「ぶどう園」を事実上我が物にしようとしていたユダヤ社会の支配者層が「農夫」として浮かび上がってくることになる。そうであればこそ、対話相手の「祭司長、律法学者、長老たち」は、これを「当てつけ」として受けとめたという最後の説明が成り立つと言える。
- ・このたとえで「息子」が死んだ後に相続財産が「農夫」のものになるのかと疑問が呈されるが、そのような事例が社会的にあり得たかどうかということではなく、「財産」を篡奪しようという意図が問題にされている。
- ・このたとえは、通説として「イザヤ書」5 章の「ぶどう畑の歌」を敷衍したものとして説明されることがあるが、ここでは「ぶどう畑の歌」のように「ぶどうの実り」の良し悪しが問題にされているわけではない。

**来週の誕生日 (8 月 23 日~29 日)**

。

**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-10「今こそ人みな」は、17 世紀ドイツの代表的讃美歌作家 P・ゲルハルトが同時代の教会音楽家 J.クリューガーとのコンビで作った讃美歌の一つ。

- ・21-471「勝利をのぞみ」(= ㊦134 番、㊦164 番)は、18 世紀ごろから歌われていた黒人霊歌(もとは労働歌?)が原型となって 1940 年代から広く歌われるようになったと考えられている讃美歌。1960 年代のアメリカ公民権運動の中で盛んに歌われるようになり、教会の讃美歌集にも取り入れられてきたが、近年の讃美歌集では採用されなくなっている。ワシントン大行進(1963 年 8 月 28 日)でこの歌を歌いながら行進する人々の姿が映像で記録されている。
- ・21-519「イザヤを招く神の声は」(= I 392「神のみこえはむかしのごと」)は、20 世紀前半に米国で活躍したユニテリアン派牧師 J.H.ホームズの作詞。19 世紀ウェールズの音楽家 W.ロイドの曲と組み合わせられ、メソジスト讃美歌に採用されてきた。『21』編纂に際して、原歌詞に即して大幅に改訳されている。

**21-10「今こそ人みな」****Nun Danket All und Bringet Ehr**

1. Nun danket all und bringet Ehr, / ihr Menschen in der Welt, / dem, dessen Lob der Engel Heer / im Himmel stets vermeldet,
2. Ermuntert euch und singt mit Schall / Gott, unserm höchsten Gut, / der seine Wunder überall / und große Dinge thut.
3. Der uns vom Mutterleibe an / frisch und gesund erhält / und, wo kein Mensch nicht helfen kann, / sich selbst zum Helfer stellt.
4. Der, ob wir ihn gleich hoch betrübt, / doch bleibet gutes Muths, / die Straf erläßt, die Schuld vergibt / und thut uns alles Guts.
5. Er gebe uns ein fröhlich Herz, / erfrische Geist und Sinn, / und werf all Angst, Furcht, Sorg und Schmerz / ins Merres Tiefe hin.
6. Er lasse seinen Frieden ruhn / in Israelis Land, / er gebe Glück zu unserm Thun / und Heil zu allem Stand.
7. Er lasse seine Lieb und Güt / um, bei und mit uns gehn, / was aber ängstet und bemüht, / gar ferne von uns stehn.
8. So lange dieses Leben währt / sei er stets unser Heil / und bleib auch, wann wir von der Erd / abscheiden, unser Theil.
9. Er drucke, wenn das Herze bricht, / Uns unsre Augen zu / und zeig uns drauf sein Angesicht / dort in der ewgen Ruh.

**21-471「勝利をのぞみ」****We shall overcome**

1. We shall overcome, we shall overcome,  
we shall overcome someday! / Oh, deep in my heart I do believe / we shall overcome someday!
2. We'll walk hand in hand.
3. We shall all be free.
4. We shall live in peace.
5. The Lord will see us through.

**21-519「イザヤを招く神の声は」****The Voice of God is Calling**

1. The voice of God is calling / its summons in our day; / Isaiah heard in Zion, / and we now hear God say: / "Whom shall I send to succor / my people in their need? / Whom shall I send to loosen / the bonds of shame and greed?"
2. "I hear my people crying / in slum and mine and mill; / no field or mart is silent, / no city street is still. / I see my people falling / in darkness and despair. / Whom shall I send to shatter / the fetters which they bear?"
3. We heed, O Lord, your summons, / and answer: Here are we! / Send us upon your errand, / let us your servants be. / Our strength is dust and ashes, / our years a passing hour; / but you can use our weakness / to magnify your power.
4. From ease and plenty save us; / from pride of place absolve; / purge us of low desire; / lift us to high resolve; / take us, and make us holy; / teach us your will and way. / Speak, and behold! we answer; / command, and we obey!